
もう一つのリブラ

鷲原シュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つのリブラ

【Nコード】

N6307N

【作者名】

鷲原シュン

【あらすじ】

ビッグバンブリーダーズに参加するため世界を回る銀河たち旅の途中ベイを使ったショーを行う家族と出会う

爆になってから不憫な立場が増えた天童遊が中心の物語です

前編（前書き）

まずは銀河たちがシヨ一の家族と出会うところから始まります
ベイブレードが嫌い、天童遊が嫌いという方はカムバックお願いします
ます

前編

銀河たちチームガンガンギャラクシーがビッグバンブレードズ優勝を目指し旅を続けていたある日

街中で人だかりがあるのを見つけた

「なんなんだろう?」

ハンバーガーを食べながら蒼いバンダナに白いマフラーの少年、銀河が興味を持つ

「ねえねえ、行ってみようよ!」

メンバーの中で一番小さな金髪の少年、遊が興味を持ち、人だかりのほうへと銀河を引っ張っていく

「おーい、待てよ」

「まったくしょうがないわね」

緑色のパーカーの少年、正宗とゴーグルの少女、まどかがその二人を追いかける

「……………結局こうなるのか」

少し遅れて長髪の少年、翼がみんなを追いかけた

人ごみの中心ではひげもじやの大男が巨大な岩を持ち上げてた

「パワフルだな」

「しかし、この後どうするかが問題だぞ」

すると大男は岩を置いて何かを取り出した

「あれは! ベイブレード」

するとその男は自らのベイを岩に向けて打ち出し、その岩を粉々に砕いて咆哮を上げた

「すげえ」

「なんという恐ろしいパワーだ」

その後登場した女性が杭から杭へ飛び移り中心に立ちながらハンカ

チでそのベイをいなししていた

そしてその女性の演技が終わると黒髪の少年が現れる、背が高くかつこいい部類に入る顔立ちだ

その少年は目を閉じたままベイを打ち出した、すると彼のベイが跳ね返ってきたではないか

「危ない！」

「顔面に直撃するぞ」

しかしその少年は目を閉じたまま跳ね返り続けるベイをよけ続けた

「凄い！」

「もう我慢できねえ！おれと勝負してくれ！」

そうついいながら正宗が自身のベイ、レイユニコルノを打ち出すが、横から来たベイにはじかれてしまう

「「「あ！」「」」

「本当にごめんなさい！」

「いやいやかまわんよ」

まどかが髭の男性に謝り続ける

「君たちもブリーダーなのだろう、私はロックオルソの熊五郎だ」
ひげの男性が自己紹介すると女性たちも続く

「私はダークブルのヨネですわ」

「俺はストームカプリコーネの仁だ」

「へえ、それにしてもさつきのは？」

「ベイを使った演劇だ、バトルだけでなく他の方法でみんなを楽しませることが出来ないかと考え家族四人で始めたんだ」

「かぞ……………ええ！家族！？」

「って言うか四人？」

「もう一人、娘の由香が居るのだが……………」

「そう、ちょうど金髪の君ぐらいの年だ」

「あ、ぼくは天童遊、相棒はこの、フレイムリブラ」

「「「フ、フレイムリブラ！？」」「」」

「え？なんでそんなに？」

「俺、知名度ないのかな」

「いや、知ってるよ、ペガシス使いの鋼銀河だろ」

「なあ、俺は？ナンバーワンブリーダーの角谷正宗さまは！？」

「いや、知らないな？」

「公演が忙しくてビッグバンブリーダーズの中継が見れないんだ」

遊と同じくらいの年頃の少女が二段ベッドの下で自分のベイを眺めながら足をぶらぶらさせていた

「彼女、どうしたの？」

「スランプなんだ、そこで遊君に、彼女を励ましてほしいんだ」

「どうして僕に？彼女もギンギンのことは知ってるんでしょ」

「いや、もちろん知ってるさ、でも君の方が年近いし、何より……」

…いや、直接会ったほうが早いな、由香」

「何、お父さん？」

彼女の顔に一瞬ドキッとしてしまった遊だが首を振って持ち直す

「お客さんだ、お前のベイも見せてあげなさい」

「うん………」

そういいながら彼女は自分の持っていたベイブレードを勇に見せる、そして彼女がその手に握っていたのは

「え！？」

「なんと」

クリアウィールの色は違えど、遊と同じ、フレイムリブラだった

前編（後書き）

はい、まずはプロローグ的な話ですね

後編（前書き）

というわけで後編です

最後にはキャラがめっちゃくちゃ崩壊します

後編

「ええー！き、きみもリブラを使うの！？」

「うん、でも、私……………」

「由香はベイが大好きなんだ、あのリブラも大事にしている」

「確かにあのリブラ、よくメンテされてるみたいね、まるで新品だわ」

「ほとんどバトルしたがないうえ毎日欠かさず磨いているからな、そりゃきれいなものだ」

「ね、ね、だったらバトルしようよ！同じベイ同士だなんておもしろそうでわくわくしてきた」

「同じ……………」

「ほら見てよ、ぼくも君と同じ、リブラ使いなんだ」
自分のリブラを見せる遊

遊のリブラが黄緑色のクリアウィールなのに対して由香のフレイムリブラは蒼いクリアウィールだ

「ね、ね」

「あの……………でも」

「遊、彼女は今スランプなんだから、そつとしてあげて」

「？スランプって何？」

「ガクツ、そうよね、努力を知らなかったものね」

まどかが入れたフォローも無駄に終わった

「ずるいぞ、おれもバトルする！」

正宗も入ってなんかややこしくなってきたので

「ならみんなバトルしようじゃないか」

ということになった

「とりあえず遊と由香は最後な」

「ええ、なんで!？」

「（だから、俺達のバトルで彼女をその気にさせるんだよ、彼女はあまりバトルしたくないから）」

というわけで第一試合

正宗VS熊五郎

「行け！ユニコルノ！」

ユニコルノがスピードを生かし立て続けにオルソを攻めていく
だが熊五郎の圧倒的パワーからシュートされたオルソの防御は固く、
ユニコルノの攻撃力でも微動だにしなかった

「なら全部のパワーを一気にたたき込むだけだ！一点集中！必殺転
技！紫電の一閃！」

強大なパワーが叩き込まれた正宗の一撃でとうとうオルソが動き最
最終的にスタジアムの外にはじきだされた

第二試合

銀河VSヨネ

「お行きなさい！ダークブル！」

ヨネのダークブルが立て続けに銀河を攻めるが…………

「ベンケイのおかげでブルの戦いは十分わかってるんだ！必殺転技
！」

ギャラクシーペガシスがダークブルの攻撃を利用して高く羽ばたいた
「ペガシス！スターゲイザー！」

そのままダークブルへと突っ込み場外へたたきだした

第三試合

翼VS仁

アキラが立て続けにカプリコーネに攻め立てられる
「くっ」

「行け！ストームカプリコーネ」

カプリコーネは正確にアクイラの位置をとらえていく

「ストームカプリコーネは、重心をずらすトラックとカットされたQボトムによる不規則な動きが売りのベイブレード、でもこれって」
アクイラがいくらかわそうとも正確にとらえていくカプリコーネ

「俺は動体視力に自信があってね、カプリコーネの動きや、アクイラの次の行動が手に取るようにわかる、そしてショーのあれは、耳で音を聞いて、カプリコーネの飛んでくるタイミングを計ったのさ」
体全体でベイの動きを感じる仁はほかの二人とは実力が違った

「アクイラ！カウンタースタンス」

しかし、カプリコーネの攻撃を衝撃波で受け止め、カウンター攻撃を決めた翼

「動きが読まれるなら、その動きを封じるまでだ！アクイラ！メタルウィングスマッシュ」

ギリギリだったが何とか勝利した翼
なんとか暗黒面が出ずに済んだようだ

そして第四試合、遊と由香のちびっこバトル

遊のリブラが攻撃を続けているが由香のリブラはそれをただ受け止めているだけだ

「リブラ………」

「ねえ、まじめにやってよ」

「え、でも」

「こんなんじゃない、君のリブラだってもっとバトリたいに決まってるもん」

「え………」

「ベイバトルはさ、ベイと一緒に思いつきりやるから楽しいんだもん」

「ベイと、一緒に………」

「この程度だったら………もう終わらせちゃうよ」

遊の落ち込みは半端なかった

「ねえ遊君」

「ほつといてよ」

完全に拗ねてしまった遊

由香が話しかけても体育座りでうつむくだけだった

「私感謝してるんだ、遊君のおかげで、リブラと一緒にがんばろう
って思えた」

「……………」

遊は少し顔を上げるもまだふてくされていた

「ありがとう」

由香は遊の正面に向き合って…………彼のほっぺにキスをした

「…………え？」「…………」

「「あ」」

「ええええええええええ！？」

「じゃあね、また一緒にバトルしよう」

由香はそう言って他の家族と一緒に帰って行った

「え、え！？え、ちよ、今、え？」

遊は混乱したまま立ち上がった、その顔は真っ赤である

「もお、遊ったらすみに置けないわね」

「ちよ、からかわないでよ」

「こいつう、やるじゃねえか」

「違うつてば！」

「ベイも同じリブラだしぴったりなんじゃないか？」

「ギンギンの意地悪！」

「ククククク」

「翼も何笑ってんのさ！もう！みんなのバカ！」

「悪かったつてば、機嫌治せよ」

その後たまたま近くを通りかかったベイブレード関連のジャーナリストにばっちり写真を撮られ彼がキスされたことはベイ関連の雑誌

で表紙に大きく載ったとか

後編（後書き）

はい、以上でもう一つのリブラ完結です
オチがしょうもねえ

しかも自分で不憫と書いておきながら結局不憫
感想などもらえたら幸いです、ぼくの初めてのベイブレード小説は
これで終了、またどこかでお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6307n/>

もう一つのリブラ

2010年10月10日11時14分発行